第24期　日本語・日本文化研修コース［上級日本語特別コース］（2004年10月～2005年９月）

籾　山　洋　介

まず，今期は，2004年10月に「日本語・日本文化研修コース」としてスタートしたが，2005年４月に，日本語プログラム全体の改編にともない，コース名が変更になり，「上級日本語特別コース」となった。実質的な変更点の一つとして，「３クラス体制」から「２クラス体制」になった。

さて，今期のコースは，「上級レベルの日本語能力の習得（話す･聞く･読む･書くのすべてにわたって）」「日本に関する基礎的理解」「各自の専門分野の基礎的な研究方法の習得と実践」の３つを目標として行われた。

学習者は13カ国，21名（中国：４名，インド：３名，ベトナム：２名，ウクライナ：２名，ポーランド：２名，インドネシア：１名，タイ：１名，イタリア：１名，ウズベキスタン：１名，ブルガリア：１名，ルーマニア：１名，ブラジル：１名，韓国：１名）であり，10名の教員が指導に当たった。

以下，主要なプログラムおよびアンケートの結果について概説する。

⑴　教科書による日本語学習（10月～４月）

『現代日本語コース中級Ⅰ』『現代日本語コース中級Ⅱ』『現代日本語コース中級Ⅰ　聴解ワークシート』『現代日本語コース中級Ⅱ　聴解ワークシート』（いずれも名古屋大学日本語教育研究グループ編，名古屋大学出版会）を教科書として日本語学習を行った。補助教材として，「プリテスト（予習のチェック）」「プリテスト：補足（連語など）」「復習クイズ」「読解シート」「文法補足説明」を使用した。また，３課ごとにテスト（筆記テストおよび話すテスト）を実施した。話すテストについては，録音に基づき個別指導も行った。

⑵　入門講義・特殊講義（10月～７月）

日本に関する基礎知識を身に付けること，研究レポートのための基礎知識および基本的な研究方法を習得することを狙いとして，10月～１月（前期）および４月～７月（後期）の期間，それぞれ４つの分野の入門講義を12回（各90分）行った。前期は，「日本文化論Ⅰ」「国際関係論Ⅰ」「日本語学Ⅰ」「言語学Ⅰ」であり，後期は，「日本文化論Ⅱ」「国際関係論Ⅱ」「日本語学Ⅱ」「言語学Ⅱ」であった。なお，学生は，前期は４科目のうち２科目以上を選択，後期は４科目のうち１科目以上を選択することとした。また，前期は，短期留学生との合同授業であり，後期は，入門講義が全学留学生が受講できるものとなった。

また，特殊講義（必修）として「日本語情報技術」（90分×15回）および「音声学」（90分×５回）を行った。

⑶　作文（研究レポートのための基礎訓練）（１月～４月）

研究レポート作成に必須の基礎知識を体系的に身に付けることを狙いとして，「書き言葉と話し言葉の基本的な違い」「文末表現の諸相」「図やグラフの説明の仕方」「引用の仕方」「要約の仕方」などについて学習した。

⑷　発展読解（10月～４月）

発展読解として，新聞などの生教材の読解，本の読解（エッセイ・小説など，教員が用意したものの中から，学習者が興味のあるものを選択），特別読解（学生が自分で読解の素材を用意し，学生主体で行う授業）などを行った。

⑸　スピーチ（10月～７月）

自国の紹介をはじめとする様々なトピックについて，学生がスピーチを行った（１人，１回，10分程度）。また，スピーチの録音に基づき個別指導を行った。

⑹　研究レポート（１月～７月）

学生各自がテーマを決め，教員の個別指導のもとで

研究レポートを作成した。分量はＡ４，15～25枚程度である。研究成果は『2004～2005年度日本語・日本文化研修コース　研究レポート集』(421ページ）として発行した。また，中間発表会（５月，発表：12分／質疑応答：８分），最終発表会（７月，発表：20分／質疑応答：５分）を実施した。なお，最終発表会は，学生からの強い要望を受けて，発表時間を例年の約２倍とした。研究レポートの題目は以下の通りである。

1．アナンド･ワンゲ（インド）「尊敬語について―『お／ご～になる』の制約を中心に―」
2．カウシク･ディーピカ（インド）「『童話伝統批判』と現代児童文学の出発」
3．カワレ　アミット（インド）「仲間たち」
4．金　暁帆（中国）「『うたかた』をステップとしてよしもとばななを鳥瞰する」
5．三分一エルネスト篤（ブラジル）「『羊』解釈をめぐる冒険：村上春樹『羊をめぐる冒険』における『羊』」
6．シェル・カロリーナ（ポーランド）「『蜻蛉日記』における道綱母の感情・態度の変化とその原因」
7．譚　向偉（中国）「日中貿易関係―日中貿易関係は競合なのか補完なのか―」
8．チャン　キム　ウェ　ティエン（ベトナム）「着物：移り変わるモードの中で」
9．チャン　ティ　フオン　タオ（ベトナム）「主語に付く『は』及び『が』の省略の条件」
10．チラベニア　アンナ　麻理子（イタリア）「コンビニへ行こう！―コンビニの人気の理由―」
11．バイソフ　ファルハド（ウズベキスタン）「『こと』の用法」
12．バルニコバ・ヤナ（ブルガリア）「日本人の海外旅行―ブルガリアが日本人に好まれる旅行先になるための戦略―」
13．ブコヴスカ・アリツィア（ポーランド）「井上通女『東海紀行』における間テクスト性」
14．ヘルニア・ルキー・アングラエニ（インドネシア）「歌詞中の英語の使われ方―2004年にリリースされたＪ－POP 分析―」
15．ボイチェンコ　レーナ（ウクライナ）「日本語字幕の文体論：日本語の台詞との比較を通して」
16．ボグダノワ・アンナ（ウクライナ）「漫画における飲食行為のオノマトペ」
17．ヤン　ソル（韓国）「韓国における指示詞の教育方法の提案」
18．ラリター・クナピンヤー（タイ）「お見合いは生き残れるか」
19．栗　睿（中国）「共感覚のオノマトペの考察」
20．劉　静（中国）「日本における高齢者の雇用問題」
21．ロショガ・クリスティナ（ルーマニア）「子供とデジタルデバイス：大人たちは何をするべきか」

⑺　総合演習（５月～７月）

日本事情・日本文化に対する理解を深めることと上級レベルの総合的な日本語力を養成することを狙いとして，新聞や雑誌の記事やテレビ番組などの生教材を用いて，総合演習を行った。テーマは「万博について考える」「ことばで伝える，ことばで遊ぶ」「日本人とスポーツ：心技体の世界」の３つである。各テーマの実施期間は１～２週間である。また，今期は，学習成果を，総合演習報告書『「万博」について考える』(85ページ）としてまとめ，刊行した。

⑻　その他

以上に加えて，独話練習，討論会（ディベート），ことばのクラス（ゲームなどを通して日本語力を高めるプログラム），定期的な漢字テストなども行った。さらに，本学の学部生向けに開講されている教養科目の１つである「留学生と日本：異文化を通した日本理解」にも参加した。

⑼　アンケート

2005年７月に，学習者に対して，コースの内容などに関するかなり詳細なアンケートを行った。以下,「全体としてコースの内容に満足していますか」という質問のみについて，アンケート結果を紹介する。

満足度	満足していない			満足している
評価	0	1	2	3
回答者	０人	２人	８人	10人

⑽　今後に向けて

最後に，必修課題である研究レポート作成というプログラムの今後のあり方，見直すべき点について簡単に述べる。まず,これまで,将来研究者を目指すといった明確な動機を持ち，熱心に研究レポートに取り組む

学生にとっては，このプログラムは極めて有益なものであった。このような留学生の場合，研究レポート作成の開始時には日本語力が不十分であっても，意欲的に研究に取り組み続けることによって，日本語の総合的な能力を飛躍的に向上させることも珍しくない。中には，研究レポートで取り組みはじめたテーマを大学院でも一貫して続け，博士号を取得した者もいる。

一方で，ほぼ毎年，研究意欲が低く，取り組みが熱心とは言えない者も若干名いる。このような学生の中には，そもそも勤勉さに欠けるという性質の持ち主と思われる者もいたが，将来，研究する，研究者になるという可能性がまったくないため，研究レポートに取り組む動機付けが低いという場合もある。

以上のような状況を踏まえて，今後どのようにすべきか，どのような可能性があるかについて少しばかり考えてみる。まず，学生が取り組む課題を，研究レポートに限定しないということが考えられる。例えば，エッセイ，紀行文・旅行記，インタビューなどに基づく報告文，創作（小説，詩，和歌，俳句）などでもよいとするというものである。ただし，このようなジャンルに対する指導は，研究レポート以上に容易でない可能性もある。また，もしエッセイなどが，研究レポートに比べて，かかる労力が格段に少ないというようなことになれば，同じ日本語・日本文化研修生として学ぶ人の中に不公平感が生れる可能性がないとは言えないだろう。今後さらに検討を続けていきたい。